

第8章 京都大学構内遺跡と京・白河

岡田保良

1 はじめに

構内遺跡として有史以後をも調査することになった契機は、昭和48年、北部構内第8地点(BG36区)の調査による瓦溜の発見であった〔京大埋文研78b〕。ここに始まった平安時代を中心とする遺跡調査は、北部構内から次いで教養部構内に及び、さらに昭和51年に病院西構内、同52年には医学部構内において、平安後期から鎌倉・室町時代にかけての良好な遺跡を発見し、現在ほぼ吉田キャンパス全域に遺跡が及んでいることが明らかとなっている。

調査を重ねるにつれて、遺物に対する年代観も次第に編年的に細分できるようになり、その成果の一部はすでに公表されている〔宇野78〕。それと並行して、遺構に対しても、各時代を追っての理解が進み、現在ようやく全構内的規模で遺跡の様相を把握できつつある。そこで注意されるのは、地域的にみて北部構内にひろく検出できる遺構群と、本部構内以南の遺構群との間に、遺跡の立地状況や遺構自体の性格についてかなり相違する要素を見出すことである。それはおそらく、奈良時代から鎌倉・室町時代にかけての、鴨川以東の開発のあり方に起因するものであり、したがって、構内遺跡全体に対する理解は、平安京郊外の土地利用や鴨東白河における都市の開発を抜きにして得ることはできない。

本章は、そうした観点から、今までに得た構内遺跡の調査成果と、合わせて周辺遺跡の調査、諸研究をふり返り、奈良時代以降の鴨川から東山に至る地域の開発、中でも「京・白河」と並び称された平安後期の鴨東白河における市街地経営のあり方と構内遺跡との関わりを探るものである。

2 京都大学構内遺跡検出の遺構

吉田キャンパスにおける歴代の調査の目録は本年報巻末第5表のとおりである。それらすべてが明確な遺構を検出した調査ではなく、今までに確認している主要な遺構を、調査地点別に第3表および第58図に示す。中には、ごく限られた部数の略報告程度の刊行物以外では公表されていない遺構も含まれているため、ここでは論をすすめるにあたって、まず各地点の遺構を概観してみる。出土遺物等の検討には十分でない点もあり、遺構の年代観については今後さらに吟味せねばならないことを断わっておく。

北部構内の遺跡 北部構内では、溝以外にあまり顕著な遺構を検出していない。それ

らを総括してみると、まず平安前・中期には、第9・第54地点など構内南部から西部にかけて遺跡の中心があり、中央から東北部にかけては遺物の出土すらごくわずかである。ところが平安後期には、中期の遺構検出地点では遺構、遺物の出土が稀薄であり、中央から東よりに顕著となる。鎌倉時代以降になると、性格はよくわからないが、2条ひと組の溝という特徴的な遺構を第11a、第12地点でみとめるほか、第16地点には室町時代の羽釜をまとめて出土した地区がある。こうした中で、溝という方向性をもつ遺構の方位が、時代を問わずおおむね真北より東に振り、平均すれば $N7^{\circ}40'E$ という値になる。まれに真南北方位をさす溝があっても、必ずその一部では東に振るように屈曲しており、計画的に正方位をとったとみなし得る遺構はない。それらのうち、第12地点の溝 SD10・SD13 と第16a 地点の溝 SD18 は、微高地の縁辺に沿う遺構である。また、出土している古瓦類は、奈良前期から室町時代にわたるが、第8・第16a 地点では平安後期、第9 地点では平安中期を中心としてまとめて出土している。

本部構内以南の遺跡 本部、教養部、医学部、病院、熊野各構内では、第50地点から第14地点にかけて、平安中期以前と考える溝があり、病院西構内第39地点でも平安中期の造作とみられる護岸跡を検出しているが、遺物の出土は少ない。北部構内にくらべて、平安中期のこの地域はまだ開発の途についたばかりであったようである。

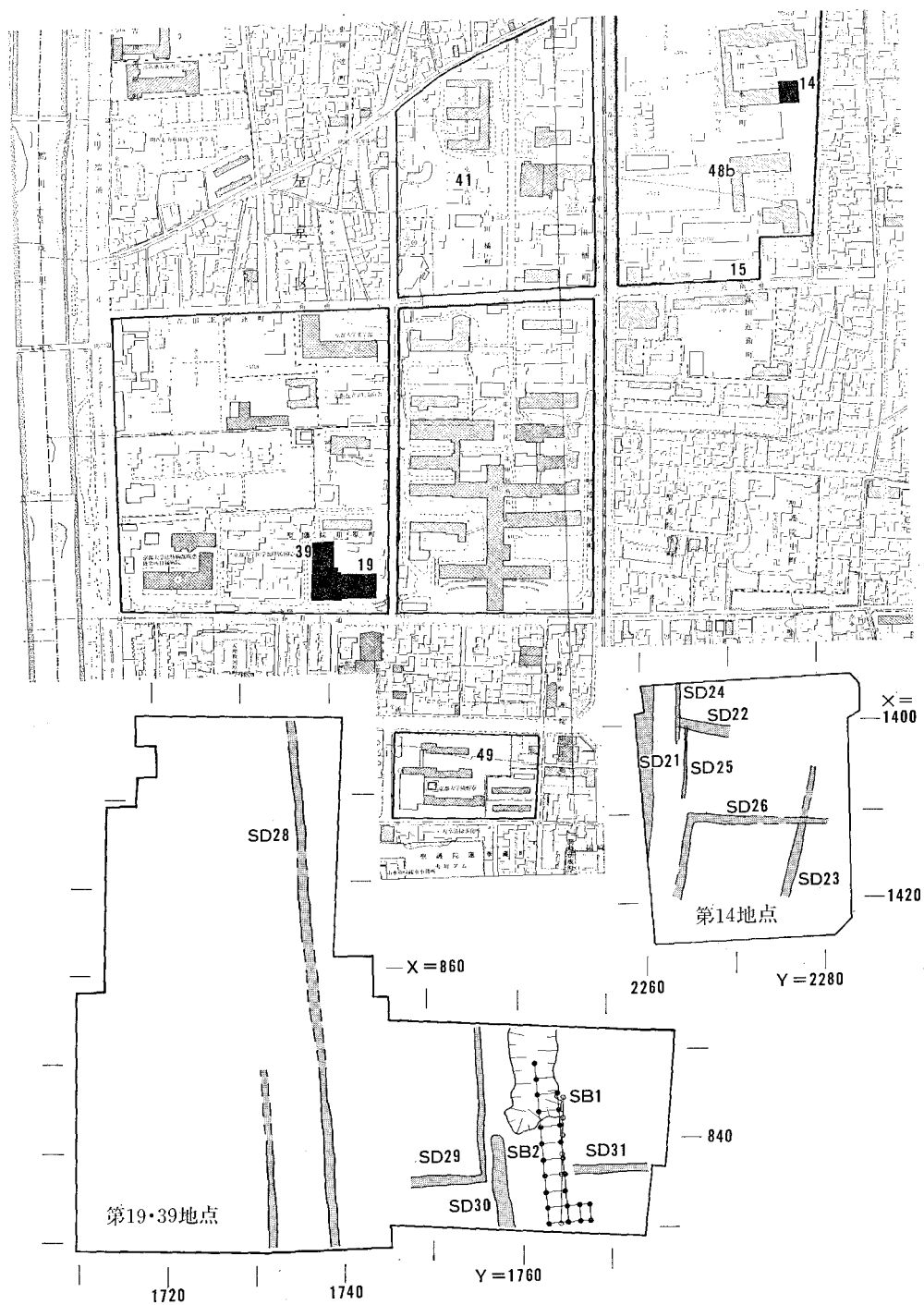
平安後期には、この地域全体に遺跡がひろがり、病院西構内第19・第39地点ではこの時期の遺構、遺物がまとまりをみせる。またこの地点における平安後期から鎌倉初期にかけての溝遺構が、その方位をすべて真北よりわずかに西に振るという傾向も、全構内遺跡を通じてここにだけ見出せる特徴である。なかでも、総延長56mにわたって検出した溝 SD28 は、これを街路に沿う遺構と判断できる点で特筆できる。

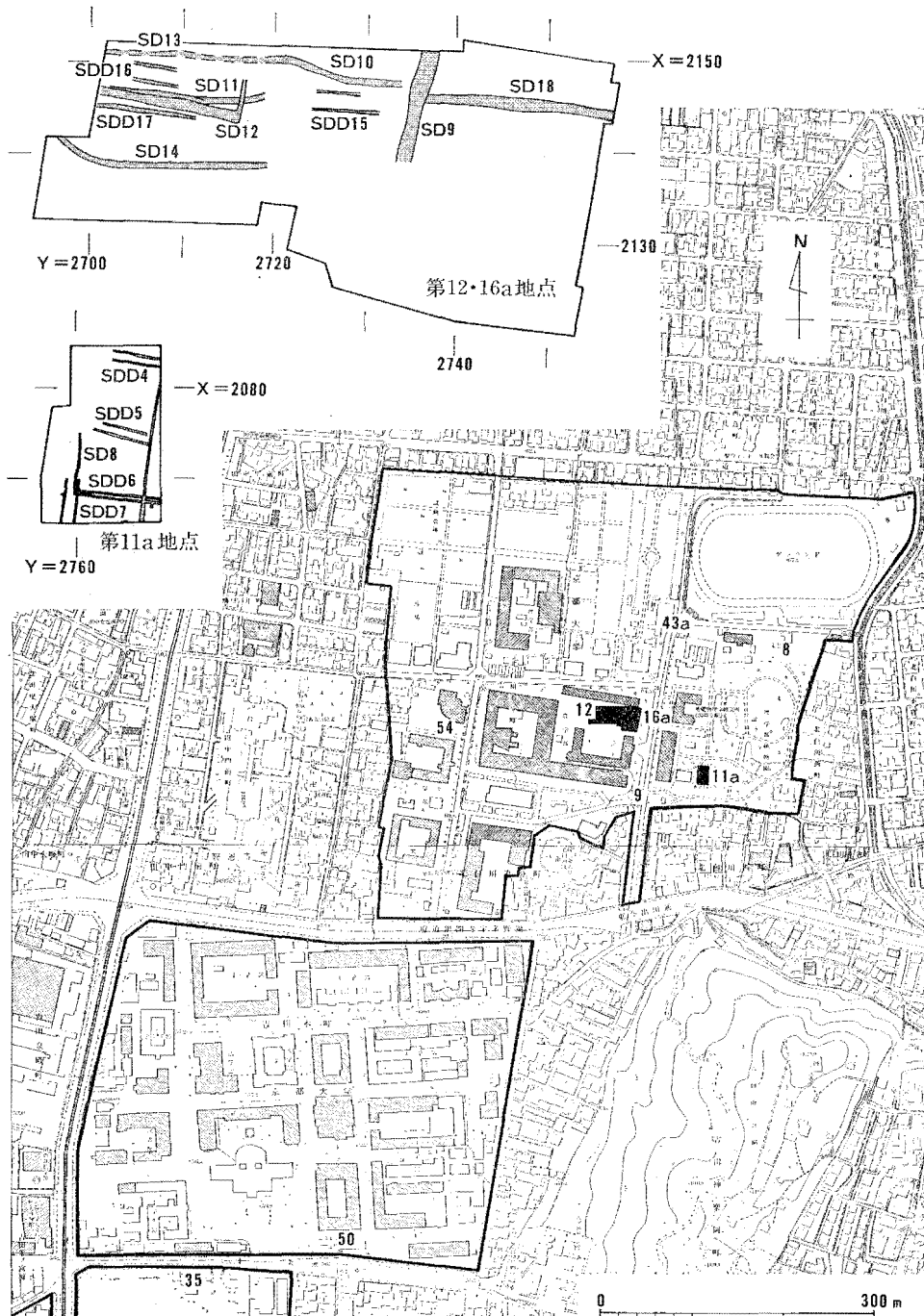
一方医学部構内第41地点は、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構が顕著で、遺物の数量も夥しい。遺構の方位は、北部構内ほどではないにしても、やはり若干東に振る傾向があるが、室町前期の遺構に限って偏角は 1° 未満である。室町後期の遺構である病院西構内の溝 SD33 もやはり正方位をとり、両地点における遺構の共通性を指摘しうる。

教養部構内でも平安後期以降の遺構を各所で検出しているが、その方位を知りうる遺構は、各時代一貫してすべて東に振り、むしろ北部構内と共通する一面を示す。近世まで降ると、各構内とも一様に田畑化するようで、個別的な方位をもつ遺構はなくなる。北部構内から病院構内に至るまで、耕作に伴うと考えている同様の柵跡を検出しており、方位の点でも $4^{\circ}\sim 10^{\circ}$ 東へ振るのである。

第3表 京都大学構内遺跡のおもな検出遺構

地 点	遺 構	規 模 (m)	検出長 (m)	方 向・方 位	年 代	備 考
北 部 構 内	8 瓦溜 SX1	—	—	—	鎌倉前期	遺瓦は12～13世紀
	9 溝 SD1 SD2 SD3	幅 0.6 0.6 0.5 深 0.3 0.3 0.3	30 7 5.5	東西 N7°20'E 南北 N7°20'E 南北 N6°～8°E	平安中期 // 奈良前期	西半で僅かに偏角小さい コの字形平面の東辺
	11 a 溝 SDD4 SDD5 SDD6 SDD7 SD8	幅 0.3 0.3 0.3 0.3 深 0.15 0.1 0.1 0.1 0.2	5 7 10 5 21	東西 N9°30'E 東西 N12°20'E 東西 N6°～7°E 南北 N6°～8°E 南北 N9°E	鎌倉～室町 // // // //	2 溝間 1.05m 2 溝間 1.05m 2 溝間は西に狭く東に広い 2 溝間 1.4m
	12 溝 SD9 SD10 SD11 SD12 SD13 SD14 SDD15 SDD16 SDD17	幅 2.4 0.7 0.8 1.1 0.5 0.6 深 1.1 0.3 0.2 0.3 0.1 0.3 0.2 0.1 0.4 0.2	12 14 8 15 11 24 5 5 10	南北 N13°E 東西 N19°20'E 東西 0° 東西 N7°30'E 東西 N6°30'E 東西 0° 東西 N3°30'E 東西 N8°E 東西 N7°40'E	平安後期 鎌倉～室町 平安～鎌倉 // 鎌倉～室町 平安～鎌倉 室 町 // //	2ヶ所で屈曲、一部真東西 西端で北へ彎曲 東端で北へ直角に屈曲 SD10の延長上 西端は北へ弧状に彎曲 2 溝間 1.9m 2 溝間 1.7m 2 溝間 1.9m
	16 a 溝 SD18	幅 2.2 深 0.7	18	東西 N4°40'E	平安～鎌倉	12地点でSD9に接続
	43 a 溝 SD19	幅 0.7 深 0.3	7	南北 N5°30'E	平安後期	
	54 溝 SD20 火葬塚 SX2	幅 0.5 深 0.3 一辺 15m 四方	10 —	南北 N12°40'E N13°～15°E	平安中期 平安後期	本年報第3章 SD9 同 SX1
	14 溝 SD21 SD22 SD23 SD24 SD25 SD26	幅 1.2以上 深 1.2 1.3 0.4 1.3 0.4 0.3 0.1 0.3 0.1 0.8 0.4	20 7 17 6 8 16	南北 N4°E 南北 N10°40'E 南北 N15°E 南北 N3°40'E 南北 N3°10'E 東西 N2°50'E	平安以前 平 安 // 鎌倉～室町 // 江 戸	SD22と直角に接続 SD22を切る SD22を切る 西端で南折、さらに7m
	15 溝 SD27	幅 1.4 深 0.6	1	南北	平安後期	
	19 柵 SB1 建物 SB2 溝 SD28 SD29 SD30 SD31	7間以上 深 1.2 梁行1間桁行8間以上 幅 1.0 深 0.35 0.5 0.4 1.9 0.5 0.8 0.2	14.4 18 56 17 10 9	南北 N2°40'E 南北 N3°W 南北 N2°50'W 南北 N1°10'W 南北 N2°50'W 東西 N1°10'W	鎌倉 倉 室 町 平安後期 平安～鎌倉 平安後期 平安～鎌倉	南端で東折、回廊状 39地点を含む 南端で西折、さらに10m 西延長上にSD27西行部
本 部・教養部・医学部・病院・熊野構内	35 溝 DS32	幅 2.8 深 1.0	8	東西 N5°W	平安以前	北肩のみ検出
	39 護岸 SX3 溝 SD33	高さ 1m 幅 1.1 深 0.6	20 15	南北 N15°W 南北 0°	平安中期 室 町	
	41 溝 SD34 SD35 建物 SB3	幅 3.0 深 0.5 1.5 0.4 南北5間東西3間以上	40 28 —	東西 N0°50'W 南北 N4°E 南北 N8°E	室 町 鎌 倉 //	本年報第2章 SD1 同 SD7 同 SB2
	48 b 溝 SD36	幅 1.6 深 0.8	4	東西 N3°E	平安後期	本年報第6章 1 SD1
	49 溝 SD37	幅 0.5以上 深 0.2	3.5	南北 N8°E	平安後期	本年報第5章 SD1
	50 溝 SDD38	幅 1.1 深 0.4	1.8	南北 N13°E	平安後期	本年報第6章 2 SD1・2





おもな調査地点と遺構

3 白河条坊の検証

構内遺跡の概況は以上のとおりである。その中で、病院西構内の遺跡は、平安後期から鎌倉初期にかけて、他の構内遺跡と様相を異にする点が顕著である。これは、法勝寺造営に始まる院政期を中心とする白河の地の開発が、新たな街割を伴っていたことによるものと考えられる。

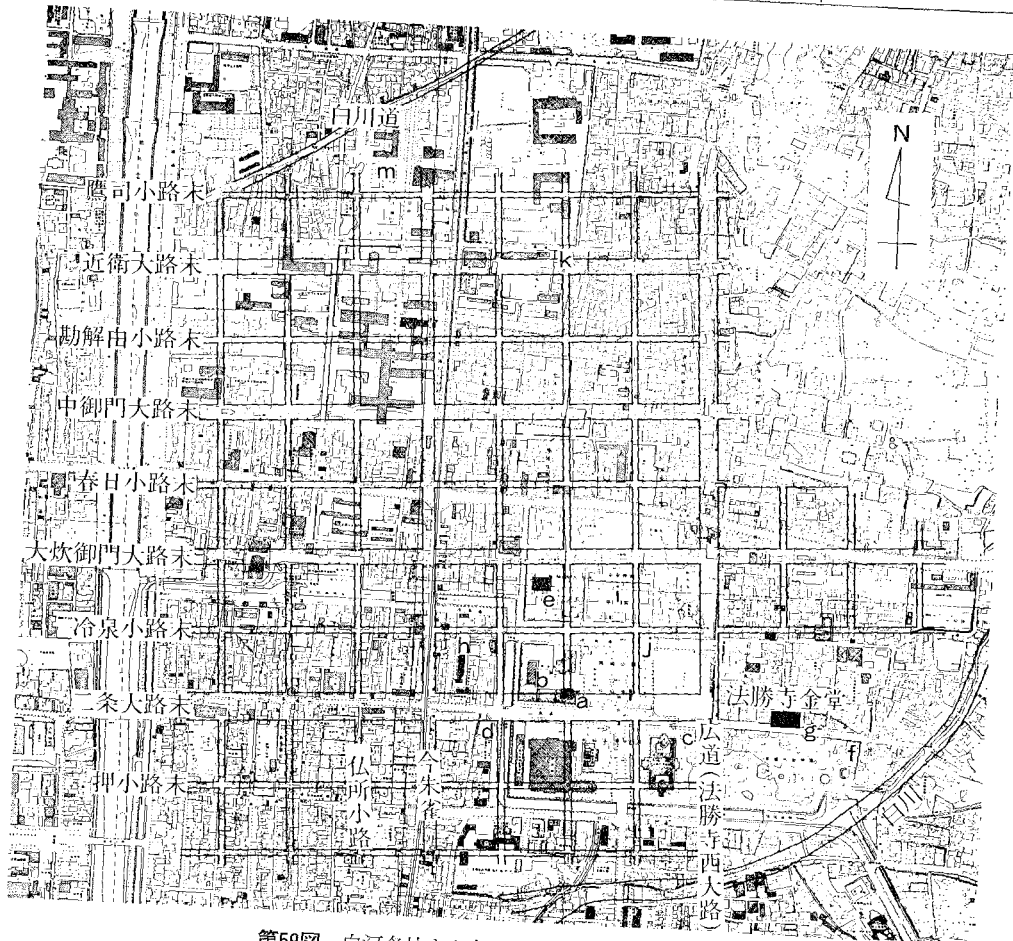
白河における街割とそこに配された寺院及び御所の比定に関しては、古くに江戸時代の地誌類にも多く掲載されており、寛延3(1748)年の森幸安の作図にかかる「中古京師内外地図」にも詳しく描かれている。降って大正年間の西田直二郎氏による法勝寺に関する論考〔西田25〕を経て、福山敏男氏がそれらに誤謬の多いことを指摘し、洛中同様の条坊の存在と六勝寺の規模や位置について詳細に再検討を行なった〔福山43〕。次いで杉山信三氏は、尊勝寺比定地の発掘調査結果をふまえて福山案を修正し〔杉山・岡田61〕、加えて六勝寺以外の白河御堂と院の御所の規模、位置を文献史料をもとに考定した〔杉山62〕。ほかにも林屋辰三郎氏の法勝寺に関する論考〔林屋60〕や津田菊太郎氏による条坊復原案〔津田78〕がある。こうした諸研究によって、文献の上から白河のかつての街並みを復原する試みは、すでに尽くされた観すらある。

一方、これらを補完し、新たな考証資料を提供しているのが一連の発掘調査である(第4表、第59図⁽¹⁾)。表中の比定物件は、一応報告者の見解によったが、これらはほぼ杉山案に基づくようである。しかし、a地点の建物が尊勝寺に属するとしても、それが塔跡なのか南大門なのか議論が分れたり、昭和53年12月末現在、京都会館西方で調査中の長大な建築遺構が検出されても、直ちに比定する物件が見あたらないなど、街割の実体はなお漠としていて曖昧な点が多い。街割の軸となすべき二条大路末についてすら、洛中と同様に17丈をと⁽²⁾たものか否か判然としていない。結局、白河と称される地域全体において、街路をどのように配置し、街区にどれほどの広さを与えたかという街割の計画性をまず明らかにする必要がある。鴨東において、平安京の条坊に倣った街割が存在したことに関する確実な資料はないが、先学の指摘する如く、白河辺の東西方向の街路が、洛中の呼称に末を付して呼ばれる点や、発掘によって検出される遺構が、正方位またはわずかに西に振る点⁽³⁾が、鴨東においてむしろ特殊な方位であることから、街割は条坊の規格に則るものとして論を進めたい。

白河天皇によって最初に造営されたのは、二条大路末に西大門が開かれる法勝寺であり、この法勝寺西辺の築垣が東西方向の、そして二条大路末が南北方向の街割の基準となった

第4表 白河地域におけるおもな検出遺構

地点	遺構	規模・構造	方向・方位	比定物件	参照文献
a	建物基壇	東西16.5m, 南北12m	N2°50'20"W	尊勝寺南大門	杉山・岡田61
b	溝	石組, 幅0.8m, 側高0.3m, 検出長67.8m	南北 0°	尊勝寺	同
c	建物	柱跡, 方5間(11.1m)	0°	円勝寺五大堂	円勝寺発掘調査団71
d	池	桁行36m, 梁行25.2m, 5間4面総装階	N0°22'E	延勝寺庭園	六勝寺研究会72
e	池	—	—	尊勝寺灌頂堂	工榮・藤村73
f	池	—	—	法勝寺庭園	木村・畑・上原74
g	建物	桁行51.2m, 梁行25.5m, 7間4面総装階	N0°12'W	法勝寺金堂	杉山・梶川75, 梶川77b
h	築垣	凝灰岩幅1m, 溝幅1.1m, 深さ0.3m	南北	得長寿院	梶川77a
i	溝と段	瓦石組溝	南北	尊勝寺	梶川・渡辺77
j	築垣	南溝・基壇・犬行・北溝各幅0.8, 2.4, 3, 2.6m	東西 N2°50'40"W	最勝寺北	同
k	溝	幅0.9m, 深さ0.2m, 検出長10m	東西 N6°30'W	室町時代福勝院	京都府教委78
l	溝	幅1.0m, 深さ0.35m, 検出長56m	南北 N2°50'W	法勝寺西大路より六町西	京大理工研78a
m	溝と壇	溝幅3m, 壇幅3m, 検出長40m	東西 N0°50'W	室町時代遺構	本年報第2章



第59図 白河条坊とおもな調査地点(縮尺1/7500)

ことは想像に難くない。すでに g 地点の調査によって、法勝寺金堂の規模と位置は確定している。また、先の福山論文に引用されている、陰陽頭による承保3(1076)年の勘文中には、洛中高倉小路西辺から法勝寺西築垣まで664丈2尺、東京極大路中央から法勝寺金堂東南角まで583丈6尺という当時の計測値が記されている。ただし、福山氏も指摘するように、この計測に用いられた尺は平安京造営尺よりも延びており、1尺は1.035平安京造営尺となる⁽³⁾。平安京造営尺を0.2991mとして〔佐々木78〕、承保勘文中の値を換算して導くと、金堂東端の位置は、発掘による推定位置より50mばかり東方へはずれる。しかし、洛中における精度からみて、その大きな誤差は多分鴨川を越える計測のためであり、陸地部ではかなり精確であったと考えられる。したがって、664丈2尺から高倉小路西辺と東京極大路中央間の承保尺による値132丈4尺を差引いた531丈8尺と、583丈6尺との差518尺は、西築垣と金堂東端との距離とみて大きな誤りはないと考える。これによって、金堂東端から西築垣までは、ほぼ160.3m前後と確定しうる。

さて、ここで今日までに確認されている遺構のうち、直接街路に接すると考えるものを抽出してみると、 a 地点建物、 j 地点築垣、 l 地点道路東側側溝をあげることができる。しかもこの3つの遺構に限って、いずれも方位を真北から $2^{\circ}50'$ 前後西へ振るという共通点がある。偶然の一致でないとすれば、その方位こそ、白河の街割を施行したときの方位ではなかったろうか。そこで、京都市発行の2,500分の1の地図上に、すでに与えられた法勝寺西築垣をのせる直線を、 l 地点(第58図参照)の溝と平行に描いて、これら2直線間を計測すると約837mという値を得る。この間に、6町分240丈の街区と小路4筋分16丈とをおさめると残りの丈尺が、法勝寺西大路(広道)とその4町西の大路(今朱雀)との幅員の和になるはずである。この場合の造営尺は、承保勘文の尺度に拘泥する必要はなく、むしろ調査担当者から報告のある法勝寺0.303m〔梶川76〕、尊勝寺0.301m〔工楽・藤村73〕に近い値を想定するべきで、2大路の和は20丈と推定しうる。すなわち、837mは276丈にあたるとしなければならない、その造営尺は0.3032mとなり、首肯しうる値を導くことができる。しかも広道を12丈、今朱雀を8丈とすれば、尊勝寺南大門と推定される a 地点建物の中心に、広道から2町西の小路をおくことができる。さらに、 j 地点築垣から同じ造営尺によって南に40丈とると、まさに a 地点建物の中心を通ることになり、この遺構を東西2町の敷地南面中央に開かれた南大門跡とする推定がさらに有力となる。

このようにして、東西方向の街割は得ることができたが、南北方向については二条末北辺と冷泉末南辺とを確定したにすぎず、他に適切な資料がない。ただ、二条末を17丈とす

るなら、洛中と同様に北へは2町おきに、幅10丈の大路をとるのが妥当のように思える。第59図に示す街割は、あくまでも白河における方格地割の基本型を示したままで、六勝寺や院の御所の占地については、この後のこととしなければならない。

4 京都大学構内遺跡の北と南

院政期に、白河の地に営まれた院の御所や御堂建築のうち、最も北にあたるのは賀陽院藤原泰子御願の福勝院である。仁平元(1151)年に創始され、その南西門を近衛末に開いていたという〔杉山62, 川上77〕。近衛末が今の近衛通りよりも北に位置することは、前節の考証結果からもあり得ないようであるが、教養部構内では平安後期の遺構、遺物が比較的まとまって出土しており(第58図第15・48b地点)、白河条坊がかなり北まで及んでいた可能性は大きい。しかし、病院構内より北では、今までに方位を西に振るかまたは正方位の同時代遺構を検出していない。法勝寺創建以降の白河における市街地の開発が、漸進的なものであって、ある時期に既存の条坊の方位と異なる街割がおこなわれた可能性もある。福山論文(5)中に、法勝寺西大路が北へ神楽岡まで通じたのは大治2(1127)年7月のことであったとの指摘があり、大治2年といえは法勝寺供養から50年を経過しており、白河に存在したと考える条坊の街割は、当初からその計画域を限定したものではないことを窺わしめる。もっとも、二条末に沿っては、尊勝寺建立の康和4(1102)年以前に計画された街割があって、その街路はすでに病院構内にまでは達していたのであろう。としなければ、尊勝寺に遅れること16年で創始された最勝寺が、法勝・尊勝両寺の間に寺域を与えられたことや、a地点建物が小路の正面に位置することが解せない。

ところが、年代は降るが、医学部構内m地点から病院西横内にかけては、正方位をとる遺構群があり、しかもm地点で確認した40mも続く溝と土壇は、街路に沿っていた可能性が大きく、室町時代には確実にそのような敷地割が存在したことを認めうる。福勝院の退転の経緯は弘安10(1287)年以降明らかではなく〔杉山62〕、室町時代には、吉田・熊野両社の境内地が、本部構内以南のほとんどを覆う〔川上77〕ことを考えれば、両社領内における再開発を考慮しなければならないだろう。

一方北部構内では、平安時代以前から方位を東に振る地割が、現代に至るまで存続しているとみるほかない。古代条里制の施行に関しては、白川水系の氾濫にしばしば見舞われていたような扇状地にどれほど施行されたかは疑問であるが、米倉二郎氏によれば、百万遍の東北に「十二坪」という坪名があったとのことである〔米倉56〕。いずれにせよ正方位による地割は全くおこなわれることがなく、微高地に沿うような溝が各所でみられる点から

みて、地形に沿った地割が優先していたものと思われる。北部構内南部は「神楽岡吉田寺」の境域が及んでいたと考えているが、それとても古来の地割に沿うものであったとするはかない。もっとも、個別の伽藍は今までに検出されたことはなく、北白川廃寺塔跡が正方位に近い方位($N1^{\circ}40'E$)を示すように〔浪貝・梶川編76〕、建物がどうであったかは判らない。

5 まとめ

京都大学吉田キャンパスにひろがる広大な遺跡が、奈良時代以降その北と南で様相を異にすることは、以上のとおりである。平安後期の白河における、条坊を模した市街地形成は、おそらく周辺の条里またはそれに準じた開発とは全く別の手法によるものであり、それが、構内遺跡のあり方に大きな相違をもたらすことになった。そこにもたらされた遺構の $N2^{\circ}50'W$ という偏角について、それが本来正方位を意図していた結果の誤差であるともみなせるが、当時の土木事業に磁石の使用があったとすれば、地磁気の永年変化にはみるべきものがある。広岡公夫氏によれば、12世紀中葉に偏角は西から東へと移るが、12世紀初頭には $N3^{\circ}W$ 前後の値をとっている〔広岡70〕。条里制の研究の中には、その変遷を地磁気の変化に基づいて解明しようとする試みもあり〔渡辺68〕、看過できない問題ではあるが、現段階ではそれを十分論じうるものではない。

そのほか、京都大学構内遺跡では、調査を重ねてきたとはいえ、歴史上、構内またはその近辺に比定しうるはずの、吉田寺、福勝院、白河北殿、吉田社旧地などが、未だ明らかにはなっていない。これらは今後に残された課題である。

〔注〕

- (1) 表記した遺構以外にも、いくつか調査されているが、一応の報告がある遺構のみ掲載した。
- (2) 二条大路末の幅員については、まず福山氏が17丈を提唱し〔福山43〕、次いで杉山氏が8丈を推し〔杉山・岡田61〕、最近では、地点調査担当者が再び17丈をとりうるとした〔工楽・藤村73〕。
- (3) 同勘文中、六条坊門小路から二条大路北辺までと押小路北辺に至る計測値が、それぞれ623丈2尺と568丈2尺であり、これを延喜式に則る丈尺645丈、588丈に相当するとして導いた。
- (4) 上記(3)の承保の2数値の差55丈は、569.3平安京造営尺となり、押小路北辺から二条大路北辺までの延喜式による値57丈に対し、0.1%程度の誤差しかない。
- (5) 『史料総覧』所収「鯨珠記」の引用による。